

笠栄治編 『平家物語総索引』

井手, 恒雄
福岡女子大学教授

<https://doi.org/10.15017/12164>

出版情報：語文研究. 35, pp.58-58, 1973-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

笠栄治編『平家物語総索引』

井手恒雄

笠さんの『平家物語総索引』が出た。岩波・日本古典文学大系『平家物語』上・下の語彙総索引として編纂されたもので、B5判五六七ページに及ぶ大部の著である。

笠さんのこれまでの著作は、いずれも「笠さんならではの」労作であったが、この『平家物語総索引』こそ、まさにそうである。笠さんを知る者として、心からその御苦労に対し敬意を表したい気持である。

この総索引は、自立語の部と付属語の部とに分かれている。自立語の部には、いわゆる単語としての自立語をはじめ、接頭語、接尾語および複合語句の主なものが取められ、付属語の部には、いわゆる助動詞と助詞とが取められている。約十九万枚のカードを使い、三年の月日をかけてまとめ上げた、文字どおりの総索引であり、独立した平家物語の索引の書として、これまであれこれの書物の付録の索引を利用するよりほかなかった平家物語研究者に、多大の便宜をもたらすものであると思われる。

およそ索引の類は、これを繰返し使用してみて、はじめてそ

の価値なり重宝さなりが知られ、いわゆる「書評」も可能である。本書をはじめて手にし、若干の語について点検した段階においては、単なる「紹介」にとどめざるを得ないが、それにしててもこの年ごろ見聞する、著者笠さんの本書にかける執念は、すさまじい。「根月端離書」という、本書のあと書きに、本書を作り上げるまでの苦労が余すところなく語られているが、笠さんの人ががにじみ出ている、おもしろい。本書は、笠さんが勤務する福岡教育大学の国語科の研究室で、多数の学生諸君の献身的な協力を得て完成されたが、毎日の単調な作業がつづけられるうちには、「ヤッター」「発狂した」となり合わねばならない日々もあったという。著者笠さんに対してだけでなく、本書を成立させた縁の下の力持ちとしての学生諸君に対しても、その労をねぎらいたいところである。笠さんを知る者としてさらにいえば、笠さんおよび学生諸君が今後みずから本書を活用して、文芸作品としての平家物語を理論的に掘り下げる方向に進んでもらいたい、それが国文学の世界における校本なし索引作成の流行に対する大方のいささかの懸念に対する生

きた解答でもあると思うのであるが、それはそれとして、本書がで上がるまでの想像を絶する苦勞に對しては、これを心から賞讃したのである。

(この紹介の一文を草するとき当たって、別に金田一春彦氏によつて平家物語總索引の書が刊行されることを知つた。笠さんの勞作をそれと並べ、あるいは両書の長短を比較して論ずべ

き性質のものであると思われるが、未見の書としてしばらくおきたい。)

(昭和四十八年四月 福岡県宗像郡宗像町赤間七二九

福岡教育大学国語科研究室内 笠柴治発行

頒価 五〇〇〇円)

奥村三雄解題『平曲正節―節付本平家物語―』

添田建治郎

本書は平曲譜本の一、京都大学国文学研究室蔵本の「平曲正節」十八卷十八冊の複製・紹介として三分冊にまとめられている。

「本文の姿を忠実に伝える」という配慮から行なわれてゐる朱筆や青筆による書き入れ、節ハカセ、発音注記などの色彩も、

墨筆同様に鮮やかに復元され譜記その他の微細にわたる判読に困難をおぼえない。冒頭に奥村三雄氏の手になる「解題」が収められ、本書を活用される研究者、わけでも、国語音韻の研究に取り組まれる諸家への案内が詳しい。以下、氏の「解題」を中心にして紹介の筆を進めること、したい。

五十ページにわたる「解題」では、文献の体裁に関する紹介

的記述については勿論、本文、譜記についての詳細で適確なる吟味が行なわれており、他の平曲譜本のもつ特徴との比較考察によつて、平曲譜本の系統關係についての記述、すなわち、へ未整理の多く認められるこの前田流平曲正節は、荻野本平曲正節を忠実に転写したもので平家正節の原稿本にあたるもの」という報告から筆を起している。次いで、狭義の音韻資料としての活用の途を明きらかにするという見地から、発音注記の紹介と現象の解釈処理、更には、発音注記の施されていることの意味に關しての考察に及び、やがて、近世初期を語るべきアクセント資料としての重要な意義について言及していく。特にこ